

## 〔書籍紹介〕 中生勝美著 『近代日本の人類学史 帝国と植民地の記憶』

著者	大澤 広嗣
雑誌名	武蔵野大学仏教文化研究所紀要
号	33
ページ	97-109
発行年	2017-02-24
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000469/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000469/</a>

〈書籍紹介〉

## 中生勝美著『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』

風響社、二〇一六年三月刊、A5判、六二〇頁

NAKAO Katsumi, *History of Anthropology in Modern Japan: Memory of Empire and Colonies*, Tokyo: Fukyōsha, 2016, 620 pp.

大澤 広 嗣

OSAWA Koji

### 一 紹介の目的

本書は、明治期から昭和前期の敗戦まで、日本の人類学史を俯瞰した研究成果である。ただし、通常の学説史のような記述の形態はとらない。日本によるアジアとの対外関係を踏まえて、その人と学問について時代との関わりを描いた作品となっている。

『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』において、本書をぜひとも紹介したい。本学は、親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗本願寺派（通称、西本願寺）の關係校であるが、近代日本の人類学史の形成に際して、本願寺派の關係者が重要な役割を果たしていた。そのため、本研究所の紀要にて取り上げる成果として相応と考える。

本論では、まずは著者の紹介及び本書全体の概要を述べよう。続いて、通常の書籍紹介の域を出てしまいが、本書の内容を参考にした上で、人類学史における本願寺派關係者の動向について、若干の言及を試みたい。

## 二 著者の略歴と研究の動機

本書の著者である中生勝美氏は、現在は桜美林大学リベラルアーツ学群の教授として文化人類学の教育と研究に従事している。長年にわたって中国、香港、台湾などの中華圏を対象として、フィールドワークを行ってきた。

主な研究成果として、『中国村落の権力構造と社会変化』（アジア政経学会、一九九〇年）、『広東語自遊自在』（日本交通公社、一九九二年）、編著『植民地人類学の展望』（風響社、二〇〇〇年）、翻訳『リン家の人々——台湾農村の家庭生活』（マージヤレイ・ウルフ著、風響社、一九九八年）のほか、多数の論文がある。

本書の課題である「近代日本の人類学史」は、著者によるフィールドワークの経験が、研究の出発点の一つとなっている。それは、かつて著者が、一九八〇年代から中国の農村調査をしていたときのことである。一九三七年に始まった日中戦争で、日本軍は中国各地を占領した。著者が、現地を調査した時期は、戦争体験

のある人々が、まだまだ生きていた。中国の現地調査をするなかで、日本軍に協力した人類学者の存在を知るのである。その学者たちは、異民族の伝統的な生活規範を調査する「旧慣調査」や、作戦時に用いる資料である「兵要地誌」の作成に関わり、時には宣撫工作に関与したのであった。

著者は、中国から出発して、対象地域をかつての「大東亜共栄圏」にまで広げて、研究成果を蓄積させていった。本書は、これまで発表した論文をもとに、加筆修正して再構成したものである。本書によって、日本人類学史の全体像が、提示されたのである。

なお、表題にある人類学について、本書での範囲を確認しておく。かつては民族学と呼ばれ、現在は文化人類学といわれる、ほぼ同一の学術分野である。ただし、戦前戦中までの民族学は、民族政策のための学問として意義付けられていた。二〇〇四年に「日本民族学会」が「日本文化人類学」と改称したことが象徴的であるように、学問の名称が変わったのである。名称の変更により、民族学による過去の遺産が忘却されてしまうことに、筆者は危機感を持っていたのであろう。日本の人類学の過去を直視したが、本書である。

### 三 本書の概要

#### (1) 構成

本書は、前後篇に分かれ、計九章にわたる重厚な分析と記述である。各章の構成は、次のとおりである。

#### 序章 研究の課題と方法

第一節 研究の問題意識と視点／第二節 『オリエンタリズム』インパクト／第三節 日本の植民地と人類学／第四節 研究の対象と方法

前篇 植民地の拡張と人類学

第一章 台湾・旧慣調査と台北帝国大学

第一節 はじめに／第二節 臨時台湾旧慣調査／第三節 台北帝国大学土俗・人種学研究室／第四節 台湾研究から南方研究へ／第五節 おわりに

第二章 朝鮮・慣習調査と京城帝国大学

第一節 はじめに／第二節 朝鮮総督府の調査事業／第三節 京城帝国大学の研究／第四節 京城帝国大学の人類学／第五節 おわりに

第三章 南洋群島・委任統治と民族調査

第一節 はじめに／第二節 南洋群島統治史／第三節 日本統治による調査事業／第四節 松岡静雄のミクロネシア民族学／第五節 日本のゴーギャン・土方久功／第六節 杉浦健一と土地旧慣調査／第七節 おわりに

第四章 満洲・満鉄調査部と満洲国の民族学

第一節 はじめに／第二節 兵要地誌と満鉄調査部／第三節 満鉄調査部の旧慣調査／第四節 満洲国の民族政策／第五節 満洲民族学会／第六節 おわりに

後篇 戦時中の民族学

第五章 民族研究所・戦時中の日本民族学

第一節 はじめに／第二節 岡正雄の研究所設立構想／第三節 民族研究所設立までの経緯／第四節

- 民族研究所設立運動／第五節 民族研究所の組織／第六節 民族研究所の活動／第七節 研究所の戦争  
関与／第八節 研究活動と海外調査／第九節 おわりに
- 第六章 内陸アジア研究と京都学派・西北研究所の組織と活動
- 第一節 はじめに／第二節 日本の内陸アジア戦略／第三節 西北研究所設立の経緯／第四節 京都学  
派の学術探検／第五節 西北研究所の成果／第六節 戦争と西北研究所／第七節 おわりに
- 第七章 イスラーム研究とムスリム工作・内陸アジアと東南アジア研究
- 第一節 はじめに／第二節 日本とイスラーム世界の関係史／第三節 イスラーム調査・研究機関／第  
四節 戦時中のムスリム調査／第五節 おわりに
- 終章 近代日本の学知と人類学

## (2) 各章の要点

「序章 研究の課題と方法」では、本書の導入に当たるもので、問題の設定を行っている。筆者は、当時の民族誌を読み込む歴史学的方法だけではなく、その調査地を訪れて口述記録を採取する人類学的方法も駆使して、この学問をとりまいた時代と社会を描いている。それは、「古典的民族誌を歴史の文脈に置いて、その政治的経済的背景から民族誌のありかたを問い直す作業」(二五頁)を行っているのである。現代日本の人類学界が、自らの淵源と学問の政治性を正面から向き合う研究者が少ないなか、筆者により実像が示されたといえよう。本章では、エドワード・サイード著『オリエンタリズム』(原著一九七八年)以降の研究史なかで本書の位置を述べる。ただし、本書は、近年の人類学者以外による人類学への批判と告発とは異なる。本書は、それらの批判に対する人類学からの応答という自己防御ではなく、現代と未来の人類学のために、生産的な議論

を進めていくものである。

本文の構成について、「前篇 植民地の拡張と人類学」（第一―四章）では、日本が参戦した日清・日露戦争、第一次世界大戦の戦果により、植民地として獲得した諸地域における人類学的調査を取り扱う。「後篇 戦時中の民族学」（第五―七章）では、一九三七年の日中戦争以降において、日本が勢力を拡大した地域での人類学的調査を取り扱う。続いて、各章の要点を紹介しよう。

前篇の「第一章 台湾・旧慣調査と台北帝国大学」では、日清戦争の結果、台湾を領有化したが、円滑な統治を行うため、現地の諸民族（漢人、原住民）の慣習に関する調査について、台湾総督府による臨時台湾旧慣調査会、台北帝国大学の土俗・人種学研究室などの実態を論じている。

「第二章 朝鮮・慣習調査と京城帝国大学」では、日韓併合により朝鮮半島が日本領となり、韓民族に古くから伝わる慣習や土地制度について朝鮮総督府による行政調査を分析するとともに、京城帝国大学の赤松智城（後述）と秋葉隆のシャーマニズム研究などの実態を論じている。

「第三章 南洋群島・委任統治と民族調査」では、第一次世界大戦の戦勝の結果、旧ドイツ領であった南洋群島が日本領となり、島民の生活と文化が調査されたが、これら調査に従事した松岡静雄（民俗学者柳田国男の実弟）、土方久功、杉浦健一による動向を論じている。

「第四章 満洲・満鉄調査部と満洲国の民族学」では、明治の日露戦争後に満洲各地の権益を取得した日本は、同地への進出を試み、昭和初期に成立した満洲国での動向を論じている。植民地会社である南満洲鉄道（略称、満鉄）の調査局による旧慣調査、建国大学や満洲民族学会による民族調査を扱っている。

後篇の「第五章 民族研究所・戦時中の日本民族学」では、岡正雄が中心となり文部省の附属機関として設置された民族研究所が、複数の学者を動員して統治に関わる調査を行った実態を述べたものである。地政学と

しての民族学が、政治性を色濃く帯びて活動が実施されたのである。

「第六章 内陸アジア研究と京都学派…西北研究所の組織と活動」では、日本が進出した内モンゴルにおかれた研究所について、調査要員で参加した京都帝国大学関係者の人脈を述べたものである。西北研究所には、今西錦司を中心に、当時は学生の梅棹忠夫が参画していたのである。

「第七章 イスラーム研究とムスリム工作…内陸アジアと東南アジア研究」では、日本の勢力下においた中国や東南アジアにはイスラームを信仰する人々が多いことから、中国回教総連合会、大日本回教協会、回教圏研究所などの各拠点での調査と工作活動の実態を論じたものである。

「終章 近代日本の学知と人類学」では、日本人類学の形成過程、大日本帝国の拡張と人類学の関係、学問と倫理について、鋭い問題提起を行っている。その中から、本評に関わる事項として、日本における人類学の起源を取り上げよう。筆者によれば三つの流れがあり、第一に社会主義運動、第二に登山、第三に宗教学であると指摘する(五〇五頁)。第一及び第二の点について、詳しくは本書を参照されたい。

第三の宗教学について説明しよう。初期の宗教学では、東京帝国大学の主任教授であった姉崎正治を代表するように、宗教の理論研究、特に心理学的な比較宗教学からの研究が見られた。その後、いわゆる未開社会のシャーマニズム、農耕儀礼に関心を示す研究者が出てきたのであるが、その関心から、西洋の人類学における学説と成果が、日本の宗教学界に導入されていったのであった。



#### 四 近代日本の人類学史と浄土真宗本願寺派

日本人類学史の学統の一つには、前述のとおり宗教学であるが、その中に複数の浄土真宗本願寺派の関係者がいた。この学統は、宇野円空（一八八五～一九四九）と赤松智城（一八八六～一九六〇）に始まる。本書によれば、両者は「早い時期から宗教人類学に造詣が深い研究者であった」（一四三頁）という。

宇野は、専徳寺（京都市右京区嵯峨野神ノ木町）の出身である。東京の高輪仏教大学を経て、京都帝国大学で学んだ後に、一九二〇年から一九二三年まで、ドイツ、オランダに留学したが、フランスでは人類学者モース（Marcel Mauss, 1872-1950）に学んだ。浄土真宗本願寺派を設立母体とする仏教大学（現在の龍谷大学）で教鞭を執ったのち、東京帝国大学宗教学講座の助教を経て、同大学の東洋文化研究所の教授を務めた。学術上の功績から、帝国学士院の恩賜賞が受賞されている。

本書によれば、宇野は、「日本民族学会の発起人の一人でもあり、戦前の学会で指導的役割を果たした」（五〇九頁）のである。また、文部省所管の民族研究所と財団法人民族学協会の共催により、一九四三年一月から始まった「民族研究講座 第一期」では、宇野は宗教民族学の講義を担当した（三四七頁）。これは一般向けの公開講座で、占領地の実情を知るための実学として、宗教民族学が位置づけられていたことを示すものである。

赤松は、徳応寺（山口県周南市川端町）の出身である。本願寺派の近代化に貢献した赤松連城の孫で、社会運動家赤松克磨と労働運動家赤松常子の兄にあたる。京都帝国大学に学び、一九一五年には宗教研究会を組織して、機関誌『宗教研究』の刊行に尽力した。

本書によると、一九二四年に朝鮮で京城帝国大学が設置された後に、一九二七年に赤松は赴任して同大文学部にて宗教学を教えたのである（一〇七、一三二頁）。同僚の秋葉隆と共に、朝鮮半島や満洲、蒙古のシャーマニズム研究を行った（一四〇頁）<sup>(1)</sup>。また満洲国の建国大学で、赤松は兼任講師として「諸教概説」を担当した（二八三頁）。同大学は、「五族共和」の教育を目指したのである。

宇野と赤松の薫陶を受けたのが、松井了穂（まついりょうおん 一八九七〜一九四七）である。松井は、西信寺（兵庫県姫路市網干区和久）の出身で、仏教大学（前述）に学んだ後、東京帝国大学選科生として宗教学を学び、龍谷大学の教員を経て、本願寺海外留学生としてフランスに留学して前述の宇野と同じくモースに師事した。帰国後、龍谷大学に戻るが、後には満洲国の建国大学に赴任した。本書では、満洲民族学会における「民族宗教」部会の主査としての松井の名前を紹介している（三〇三頁）。松井は、フランス社会学のアルブヴァクス（Maurice Halbwachs, 1877-1945）、イギリス人類学者マリノフスキー（Bronislaw Kasper Malinowski, 1884-1942）の翻訳を手がけている<sup>(2)</sup>。なお、マリノフスキーの翻訳は、当初は、赤松智城・宇野円空監修「原始文化叢書」（岡書院）に所収される予定であったが、この叢書ではなく別途に刊行された。この叢書の翻訳者に、複数の龍谷大学出身者がいた<sup>(3)</sup>。

本書で、特に言及した箇所はないが宇野の系譜に連なる、棚瀬襄爾（たなせじょうじ 一九一〇〜一九六四）をここで触れておこう。棚瀬は、光泉寺（岐阜県瑞穂市別府）の出身で、東京帝国大学で宇野から宗教民族学を学び、戦時中は半官半民の財団法人東亜研究所に勤め、東南アジア諸民族の宗教研究に従事している。戦後は、龍谷大学を経て、京都大学で東南アジア研究を進めるが、五〇代半ばで早世している。棚瀬の指導を受けたのが、口羽益生（くちばあきお 一九三一〜）氏で、満行寺（島根県邑智郡南町井原）の出身である。口羽氏はコーネル大学留学を経て、龍谷大学で教鞭をとったが、その学風は、戦前の民族学ではなく米国流の文化人類学であった。

評者にとつて、気になる点がある。宇野と赤松など彼らの学問と信仰は、いかなる相互関係にあったのか。興味深いことに、宇野は、人類学の専門書を出しつつ、浄土真宗の教学に関する専門書の編集に当たっている<sup>④</sup>。人類学では、多神教の神々やアニミズムの諸霊を研究するが、浄土真宗はただ阿弥陀如来のみに対して専修念仏を称えるものである。

全く異なる宗教であるが、彼らの中で、客観による学問対象と主観による自身の信仰は、共存していたのである。本願寺派の学統には、宗門を近代化した島地黙雷から連なる、海外の学問を先取する精神があった。近代的学問の草創期に生きた本願寺派人類学者による学問と信仰を考察することは、近代日本の仏教者による信と知の在り方を知る手掛かりとなろう。

## 五 結語

以上で、本書の概要について紹介してきた。本書によつて、日本の人類学の学問形成が、植民地拡張という当時の時代情勢、そして更なる占領地の拡大を経て、「大東亜共栄圏」の建設とは無縁ではなかったことが、著者によつて明らかにされたのである。本書に興味をもたれた方は、一読を勧めたい。副題にある「帝国と植民地の記憶」は、人類学に限定することなく、人文科学のあらゆる研究者は、自分自身の問題として考えるべき課題であろう。

本書の「あとがき」によれば、戦前の植民地にいた日本人の人類学者が、敗戦後は日本本土に引き揚げて、連合国最高司令官総司令部（GHQ）の調査部門に勤務していた事例が多いと指摘する。そして、GHQに在

職したアメリカ人の人類学者は、戦時中における戦略目的で行われた日本研究に関わりから、戦後の人類学に浸透していたと述べている。筆者の次著は、「戦中から戦後にかけてのアメリカの日本研究を基軸にしたアメリカの人類学史を書きたい」(五二三頁)とのことで待望できよう。

なお、近代日本の人類学史における浄土真宗本願寺派の人脈については、評者がまとめた研究論文等の目録を掲載するので、関係各位は参考にされたい。

## 注記

- (1) 赤松智城と秋葉隆による共著での研究成果に、『朝鮮巫俗の研究 上・下巻』(大阪屋号書店、一九三八年)、『満蒙の民族と宗教』(大阪屋号書店、一九四一年)。
- (2) 松井了穂による翻訳の成果に、アルブワックス著『宗教心の社会的起原——デュルケム「宗教社会学」要綱』(顕真学苑出版部、一九三三年)、マリノウスキイ著『原始心理に於ける父』(学芸叢書第一、龍谷大学学芸部内宗教と芸術社、一九三八年)、マリノウスキイ著『原始民族の文化』(文化と技術叢書第六、三笠書房、一九三九年)。
- (3) 赤松智城・宇野円空監修『原始文化叢書』(岡書院)において、マレット著『先靈観——原始の超自然観』(第六編、一九三〇年)の訳者の野村了本は、西光寺(岐阜県揖斐郡大野町公郷)の出身で一九二五年龍谷大学文学部宗教学宗教史専攻卒業。リヴァーズ著『原始文化伝播説』(第五編、一九二八年)の訳者の長岡曠若は龍雲寺(山口県長門市油谷向津具下)の出身で一九二八年龍谷大学同専攻卒業。
- (4) 宇野円空による主な成果として、宗教民族学分野では、『宗教民族学』(人類学叢書第六編、岡書院、一九二九年)、『マライシヤに於ける稲米儀礼』(東洋文庫論叢第二八、岩波書店発行、丸善発売、一九四一年)、浄土真宗の教学分野では、編著『聖典講讀全集 第一〜七卷』(小山書店、一九三四〜一九三五年)など。

(文化庁文化庁宗務課専門職 (専門)宗教学)

附録 近代日本の人類学史と浄土真宗本願寺派関係者の研究文献目録

① 宇野円空

伊藤幹治「宇野円空——稲作と信仰」（森鹿三・伊藤幹治『日本民俗文化大系 一二』講談社、一九七八年、二〇三―三八六、三九五―三九八頁）。

伊藤幹治「宇野円空論拾遺」（『民博通信』第二〇号、国立民族学博物館、一九八三年）、二―四頁。

大矢野文明「宇野円空の人と学問」（田丸徳善編『日本の宗教学説』東京大学宗教学研究室、一九八二年）、八七―九八頁。

小口偉一「回想・宇野円空先生」（『日本民俗文化大系月報』第一一号、講談社、一九七八年、九―一〇頁）。

鷹谷俊昭「珠玉のことは 宇野円空の歌」（『大乘』第三四卷第五号、大乘刊行会、一九八三年）、四四―四八頁。

柳瀬襄爾「宗教民族学者としての故宇野円空先生」（『民族学研究』第一三卷第四号、日本民族学会、一九四九年）、八一―九三頁。

藤秀璋「宇野円空——拾遺妙好人伝」（『大乘』第六卷第九号、大乘刊行会、一九五五年）、四四―五〇頁。

藤秀璋「明師の言葉」（永田文昌堂、一九五七年）所収の「宇野円空」（二三三―二五二頁）。

② 赤松智城

明石竜義編『寺史』（徳応寺、一九九二年）、全一〇九頁。

菊地暁「赤松智城論ノオト——徳応寺所蔵資料を中心に」（『人文学報』第九四号、京都大学人文科学研究所、二〇〇七年）、一―三五頁。

菊地暁「智城の事情——近代日本仏教と植民地朝鮮人類学」（坂野徹・慎着健編『帝国の視角／死角——（昭和期）日本の知とメディア』青弓社、二〇一〇年）、八〇―一一二頁。

菊地暁「ブッディスト・アンソロジー・赤松智城」（『近代仏教』第一八号、日本近代仏教史研究会、二〇一一年）、四四―五九頁。

全京秀（チョン・ギョンス）著、岡田浩樹・陳大哲訳『韓国人類学の百年』（風響社、二〇〇四年）。特に第二章「植民地支配と韓国人類学」（四三―一三七頁）。

全京秀著、板垣竜太訳「赤松智城の学問世界に関する一考察——京城帝国大学時代を中心に」（『韓国朝鮮の文化と社会』第四号、韓国・朝鮮文化研究会、二〇〇五年）、一五六―一九二頁。

全京秀著、川瀬貴也訳「宗教人類学」と「宗教民族学」の成立過程——赤松智城の学史的意義についての比較検討（『日本思想史懇話会編』季刊日本思想史」第七二号、特集「近代日本と宗教学——学知をめぐるナラトロジー」、ペリかん社、二〇〇八年）、一〇七—一二九頁。

七沢賢治「赤松智城」（『宗教学年報』第二二輯、特集「日本の宗教学者」、大正大学宗教学会、一九七六年、八四—八七頁。

羽沢了諦「赤松智城博士を悼む」（『宗教研究』第三三卷第四号（通巻第一六三号）、日本宗教学会、一九六〇年）、一二九—一三二頁。

山口大学附属図書館文理学部分館編「山口大学文理学部赤松文庫図書目録」（山口大学附属図書館文理学部分館、一九五四年）、全一八六頁。

③ 松井了穩

大澤広嗣「宗教学研究者と「満洲国」——建国大学の松井了穩」（『仏教文化学会紀要』第一五号、仏教文化学会、二〇〇七年）、一五八—一七九頁。

④ 棚瀬襄爾

口羽益生「人と学問 棚瀬襄爾——宗教民族学者」（『東京都立大学社会人類学会編』『社会人類学年報』第六卷、弘文堂、一九八〇年）、一五五—一六八頁。

口羽益生「棚瀬襄爾——宗教文化史的民族学者」（綾部恒雄編『文化人類学群像』三 日本編（アカデミア出版会、一九八八年）、三九—四一〇頁。

堀一郎「棚瀬襄爾君の想い出」（『東南アジア研究』第二卷第四号、京都大学東南アジア研究センター、一九六五年）、一〇—一〇三頁。

Y「棚瀬襄爾氏を悼む」（『大乘』第一六卷第一号、大乘刊行会、一九六五年）、六二頁。